

験することも多く、不慣れな点が多々ありますが、学生のみならずに食品と健康の関わりについて興味を持ってもらえるように、しっかりと務めて参りたいと思いますので、皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

「農学部より第46号より転写



食料生命環境学科
助教 浦 剣 (Pu Jian)

はじめまして。東京大学大学院工学研究科博士課程修了後、特任研究員として、東京大学サステイナビリティ学連携研究機構で、工学とサステナビリティ学的視点に気候変動影響・災害リスクなどに関する研究をしてきました。2015年12月から山形大学農学部で助教として勤務することになりました。CRIS-T「迅速・高精度・網羅的な病原微生物検出による水監視システムの開発」というプロジェクト

チームの一員として、養殖カキの定期的な病原微生物モニタリングを行い、ウイルスの存在状況についてのデータを蓄積する。また、これらのモニタリング結果とこれまでの流入下水等のモニタリング結果から、研究対象地域の感染性胃腸炎の監視対象ウイルスをノロウイルスとすることが妥当であると考えられます。

プロジェクト専任教員のため、講義は担当せず研究活動を通じての教育となるが、教育者としてのスキルアップを常に意識し、学生からも頼りにされるように努力したい。海外調査に出たい学生に対し、適切なアドバイス及び情報を提供する。機会があれば、学生を連れて見学や現地調査もしたい。日々の交流から、英語を用いたコミュニケーション及びプレゼンテーションを行える能力を少しでも育成したい。学生から意見を引き出して、学生と活発に意見交換できる雰囲気を作りたと思います。

研究者として未熟なところが多々ありますので皆さんにいろいろご迷惑をかけると思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

「農学部より第46号より転写



退職によせて



「退職直前に 考えたこと」

食料生命環境学科
森林科学コース

教授 野堀 嘉裕
(昭和55年院林学専攻修了)

私、生まれも育ちも東京葛飾です。日本大学農獣医学部林学科を卒業した後、昭和53年4月に山形大学大学院農学研究科修士課程林学専攻に入学し、昭和55年に課程修了後、北海道大学の大学院博士後期課程に進学しましたので、生粋とはいえませんが鶴窓会の同窓生になります。農学部は創設時に2学科制でスタートした後、5学科へ拡大路線を歩んでいた時期でした。社会人として王子製紙林木育種研究所、東北大学農場勤務を経て、農学部に入職したのは平成5年3月からです。当時の農学部は5学科制から2学科

制へ改組した直後でした。その後、農学部は平成10年に3学科制へ、平成22年に食料生命環境学科1学科に改組し、現在に至ります。大学院生時代から考えると5学科制以降の全ての学科体制を経験したことになりました。改組の度に複雑性を増す農学部はいつた何処に向かっているのだろうか、という感慨もありますが、同窓会が学科ごとにある昔のことを考えれば、学科(講座やコース)間の垣根は以前に比べて随分と低くなっているように感じます。地球規模での食料・生命・環境問題を考えるとき、日本の政治経済状況が如何に変化しようとも農学部の将来展望にネガティブ要素は全く無いと確信しています。森林計画学会を母体として鶴岡で開催した日本と台湾の合同シンポジウムや、岩手大学連合大学院の教員とのモンゴル北部の森林での共同研究を通じて学際的な研究が大学にとって如何に重要か痛感してきました。最近では学生を主体とした国際交流が盛んになってきています。様々な分野の研究者や学生間の意思疎通を基本とした融和は、農学部のポジティブな要素を増幅しようとする場合、極めて有効な手段だと思います。そのために、学科(講座やコース)間の垣根を低くする改革は必須であり、このような改革を停滞させてはいけな



食料生命環境学科
助教 中坪 あゆみ

2016年4月より、カルビー株式会社相談役・松尾雅彦氏のご支援により山形大学農学部にご設置されました寄附講座「食料自給圏(スマート・テロワール)形成講座」を担当いたします中坪あゆみです。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は岩手県宮古市で生まれ育ち、青森県十和田市で学生生活を送りました。今回ご縁があり、山形県鶴岡市に移住することになりました。鶴岡での生活を公私ともに満喫しようと思っております。

講座名にある「スマート・テロワール」とは、松尾雅彦氏が著書

の中で提唱されているもので、フランス語の土壌や特徴ある地域などを表す「Terroir(テル)」から派生したテロワールに、英語の洗練されたを意味するスマートを付け加えた合成語で、地域内でできる限りの自給を目指す地域ユニットのことです。この寄附講座では、地域内に耕畜連携・農産物加工による資源循環型農業を基本とした食料自給圏をつくり、日本の美しい里山の風景や文化を守りながら、その農村や地域が地産地消の経済を発展させ自立できるようなビジネスモデルを構築することを目指しています。

新しい土地での研究は、不安なことがたくさんありますが、教職員の皆さまや学生さん、地域の方々にお力添えをいただきながら進めていけたらと思っております。また、本寄附講座での研究成果が山形大学ならびに庄内地域の発展に寄与すればともうれしく思います。そのために私も、有意義な研究成果を残せるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

「農学部より第46号より転写

いと感じています。無駄な時間を使っている場合ではないというのが実感です。農学部独特の教育研究分野の広大さを有利にとらえて将来展望を考えるべきなのです。ひとつのアイデアとして、中期計画期間に相当する6年毎に、公開で改革案のコンペをするというのは如何でしょうか。若手の教員からきくと面白いアイデアがたくさん出てきますよ。

ところで、私の研究分野は森林資源計画学といます。森林にどのくらいの資源がありどのくらい使うことができるのか、という課題を明らかにする研究分野です。英語で表現するとフォレストインベントリーといい、これを日本語直訳すると「森林の棚卸学」になります。地球温暖化が問題視されるようになって以来、森林の炭酸ガス吸収源としての機能を明確化する研究にシフトしてきています。従来の森林管理は小班(施業班)単位で行うことが前提となっていました。最近では航空機からのレーザーキャナリ技術を応用した毎木調査により、二本一本の情報が容易に得られる時代となってきましたので、森林管理は単木管理の時代を向かえようとしています。元々、森林の管理は、作付けから収穫期までの期間が農作物に比べ超長期となるので、森林への関与の効果が短期

間ではみえにくい性格を持っています。この問題を解決するため、百年以上前のドイツでは、10年に一度、計画と実行、照査、修正を繰り返すという考え方が開発されました。この考え方はプラン・ドゥ・チェック・アクション(PDCA)サイクルを繰り返すスパイラルアップ方式です。一般的にトヨタ方式といわれるこの生産性向上技術は、実は百年以上前に森林科学で考え出された生産技術体系なのです。山形大学ではリーディングポリシーとしてこのPDCAサイクルを掲げています。教育研究機関としての不断の改革を目指したものです。教育自体が生産期間の長い構造になっているので、この考え方が重要になるのだといえます。

大学は教員らの研究成果を通じて学生に教育を付加しようとして社会に還元する機関です。一方、学生が受けた教育の一部は卒業後直ちに社会に還元され始めますが、その成果が社会に還元されて効果を発揮するまでには時間がかかります。入学した学生は学部で4年、更に修士まで進むと6年の教育を受けます。卒業生が社会に出て教育の成果を社会に還元するには卒業後数年から数10年の期間が必要です。教育は単年度作物と同じ生産方式というよりもむしろ森林管理の考え方と似てい

ると思いませんか。学生への教育の成果が実質的に社会に還元されるまでの時間が相当長いことは、自分が退職する時期になってもやっと思感し始めたことでした。教育と研究を実践していくためには自分自身の心身が健康でありつつ、職責を全うしなければならぬということを今頃になってやっと思感しているこの頃です。

最後になりますが、これまでの教育と研究を支えて頂きました、農学部の教員の方々、また私の在職中に農学部で勤務されました全ての職員の方々にはひとかたならぬお世話になりました。心よりお礼申し上げます。これからの農学部と鶴窓会の発展を祈念しつつ退職のご挨拶といたします。

(平成28年10月28日記)



エル・サングループ【冠婚葬祭】

ご葬儀事前相談 増えています。

こんな思いをしないで済むように

- ◎思ったより費用がかかってしまった。
- ◎あの方に知らせないでしまった...
- ◎子供達に迷惑をかけたくない

365日24時間
0120-91-5002

チャペルウェディング
グランドエル・サン

エル・サン 検索

アク・サン 検索

鶴岡・本町・大山
余目・あつみ

《特集》 鶴窓会福島県支部が発足しました

鶴窓会福島県支部長

松村 正彦

(昭和56年園芸学科卒)

長年の懸案でした鶴窓会福島県支部が平成28年2月6日(土)の設立総会で発足し、6月18日(土)には第2回総会を開催することができましたので、経過を報告するとともに、来年の第3回総会では100人以上の懇親会にしたいので、予告のために筆を執りました。

鶴窓会の名簿で数えると、福島県出身者は四百数十名掲載されていますが、福島県には鶴窓会支部がなく、農業工学科の「キャタピラ会福島県支部」、林学科の「福島やちはば会」など学科単位の活動でした。

こうした中、県内の同窓生からも鶴窓会本部からも福島県支部を立ち上げようという機運が高まってきていたことから、平成27年度鶴窓会代議員会にオブザーバーとして私が出席しました。支部を立ち上げるために一番ほしかったのは、会員へ開催通知を届けるための郵送代でした。

が、鶴窓会本部で支部結成・強化費を予算化していることがわかり日処が立ちました。そこで、県職員と同窓生が100名以上いて連絡が取りやすいことから、まず、県職員で支部を立ち上げ、その後は鶴窓会本部の予算を活用して広く通知することとして支部設立の準備を進めました。

設立総会は、今年2月6日(土)に福島市内の杉妻会館にて18名の出席者で開催し、支部規約、役員体制、個人情報管理規程を決定しました。

第2回総会は、6月18日に郡山市内の郡山ビューホテルで開催することとし、483名に対し、往復はがき375通の郵送と電子メール108通の送信で通知をしました。当日は、会員25名と鶴窓会の佐藤農一会長にご出席いただきました。少人数ではありましたが、昭和34年3月に農学科を卒業された高橋寛之さんをはじめ、今年3月に卒業した方まで幅広く参加いただき、よい交流の場となりました。また、欠席者からは近況報告とともに、次回はぜひ出席したいとのメッセージを多数いただきました。

次回は平成29年6月に100名以上の出席者で開催したいと思いますので、今から予定してください。また、電子メールが使える方はメールアドレスや住所などを支部までお知らせいただくことまめに連絡が取れますのでよろしくお願ひします。

鶴窓会福島県支部のメールアドレス kakusoukaifuku@gmail.com



山形大学農学部創立70周年記念事業について

創立70周年記念事業
副実行委員長・鶴窓会会長

佐藤 農一

山形大学農学部は、昭和22年戦後間もない食糧難の時代に、山形県立農林専門学校として創立され、昭和24年山形大学農学部として発足して以来、平成29年に創立70周年を迎えます。創立から平成28年3月までに農学部及び大学院農学研究科が輩出した有為な人材は九千七百人を超え、卒業生が日本のみならず世界の各分野に幅広く活躍しているところであります。

農学部創立70周年を迎えるに当たり、記念事業として以下のとおり行うことになりました。

1. 創立70周年記念誌の出版
 2. 記念式典の開催
 3. 記念講演会の開催
 4. 記念祝賀会の開催
 5. 教育支援、学生支援、国際交流及び研究支援に関する事業
- 山形大学農学部創立70周年実行委員等名簿は下記のとおりです。



70周年記念事業への募金のお願ひ

これらの記念事業を行うためには事業費として50万円以上が見込まれますので(財務担当作業部会)、多くの方々の支援、協力が必要になります。

記念事業への募金として1口5,000円としています。なお、2口以上ご協力くださった方には「創立70周年記念誌」をお届けいたします。

けすることにしております。農学部の農業教育、研究の充実と更なる飛躍を図るためにも何卒2口以上のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

当鶴窓会だよりに、募金用紙を同封致しますので、平成29年3月末日まで振込をお願いいたします。

山形大学農学部創立70周年記念事業実行委員等名簿		
コース名等	氏名	
山形大学農学部創立70周年記念事業実行委員会委員	学部長(実行委員長)	林田 光祐
	鶴窓会会長(副実行委員長)	佐藤 農一
	副学部長(副実行委員長)	村山 秀樹
	副学部長	小沢 互
	顧問	粕淵 辰昭
	記念誌編集作業部会長	高橋 敏能
	財務担当作業部会長	藤井 弘志
	安全農産物生産学コース	
	食農環境マネジメント学コース	藤科 智海
	食品・応用生命科学コース	塩野 義人
	植物機能開発学コース	村山 哲也
	森林科学コース	柳原 敦
	水士環境科学コース	梶原 晶彦
	やまがたフィールド科学センター	佐々木 由佳
	事務長	滝口 仁
	鶴窓会	高橋 敏能
記念誌編集作業部会委員	安全農産物生産学コース	松山 裕城
	食農環境マネジメント学コース	藤科 智海
	食品・応用生命科学コース	加来 伸夫
	植物機能開発学コース	笹沼 恒男
	森林科学コース	柳原 敦
	水士環境科学コース	梶原 晶彦
	やまがたフィールド科学センター	佐々木 由佳
財務担当作業部会委員	鶴窓会	齋藤 博行
	鶴窓会	菅原 幸司
	鶴窓会	佐久間 憲生
	安全農産物生産学コース	藤井 弘志
	食品・応用生命科学コース	塩野 義人
	植物機能開発学コース	村山 哲也



なお同期間以降も随時承りますので、ご協力をお願い申し上げます。